かささぎ 通信 第37号

2015年9月11日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年七月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年初出の三作品を読みました。
「ステッキえんぴつ」（10月号）
「ほたる」「ぬり繪」（11月号）

昭和8年の作品というと、今から82年前の作品ということになります。三作品ともに当時の世相がうかがえるような小道具が作品のキーワードになっています。集まった会員にとっても、同時代的に知っていることではないのですが、何だか懐かしい思いになったり、自分の子どもの頃と比べたりして、楽しい一時を過ごしました。

「ステッキえんぴつ」（名・早川七郎）は、町のおばさんからのお土産に兄弟がもらった、雑誌とステッキえんぴつにまつわる話です。ステッキえんぴつとはどのような鉛筆でしょうか。インターネットで検索したところトンボ鉛筆創立百周年を記念したサイト、「トンボのキセキ FLIGHT TO 100」の中に、一九一五年製作の銘柄鉛筆に「ステッキ鉛筆」がでてきました。セルロイド製のステッキの装飾を鉛筆に取り付けたもので、「チャップリンの短編喜劇映画の流行ともあいまって一大ブームを起こし」たと説明があります。新しい物や珍しい物を教室に持ってきたことを契機に、ねたみや後悔などの心の葛藤を描いた作品は、「うんすんガルタ」「だゝつ子」等これまでにもいくつかありました。三郎童話「ステッキえんぴつ」では、弟のことをうとましく思い、友達と一緒に弟を仲間外れにしたこともあるのに、友達が自分の弟のことを笑いものにすると、思わず弟をかばうという兄の心理が描かれています。当時の読者の子どもたちにとって、日常の様々な場面で覚えのある題材だったことでしょう。

『赤い鳥』昭和8年11月号の「ほたる」（名・森三郎）、「ぬり繪」（名・土居その子）は二作品とも女の子たちが登場人物の話です。九月の「読む会」のテキスト「五年のころ」（『赤い鳥』昭和8年12月号・名・大葉しげ子）も女の子たちの友情の話です。これは『赤い鳥』各号の構成にも関係していることかと思われます。森三郎の編集者としての立場もうかがえます。

ところで『ほたる』には、ほたるを入れるほたる籠を編むという話がでてきます。「おとなりの武雄さんの家から、麦わらをもらって来て、水にひたして、ほたる籠をあみました。それへ、つゆ草と一しょにほたるを入れて、・・・・ときどき籠の上から霧をふきかけてやりました。」ほたる籠を編んだことがあるという会員もいて、ひとしきり作り方などの話題で持ちきりでした。また、主人公が「ほゥたる来い、山伏来い、来たら卵の水のましょ。」と歌う箇所があります。「蛍狩り」のわらべ歌にはいろいろなタイプがあるという話をしてくれる会員もいました。森三郎さんはどの地方のわらべ歌を基にしているのか分かりませんが、わらべ歌に対する森三郎さんの造詣の深さを感じます。

『ぬり繪』には「お一二の薬屋さん」が出てきます。手風琴を鳴らし、カーキ色の軍人のような服に金ぴかの筋のついた帽子、カバンを肩にかけ、長靴をはいた薬屋さんの挿し絵（前島とも子）が載っています。明治時代、日清・日露戦争と続いたころから、軍服まがいの格好で「生盛薬館（せいせいやかん）の製剤は」とうたって歩いた薬売りがいたそうです。富山の薬売りとは別の、お一二の薬屋さんが森三郎さんの子どもの頃には刈谷にもやって来ていたのでしょうか。　森三郎作品には時代の姿を示す資料としての一面もあるといえると思います。

次回予定　10月9日（金）午後1時～3時
『赤い鳥』昭和9年1月号初出作品　「沼」・「鈴」